
魔法を使う者

優姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法を使う者

【Nコード】

N5268P

【作者名】

優姫

【あらすじ】

「長きにわたる戦争をやめたい」そのために魔王を呼び出した力ルオ。だが、魔王は戦争をやめさせたくばそちらの姫を王子と結婚させると言う。姫はそれを受け入れ結婚する。王子と姫の未来はいつたい？

魔法を使う者

わーん！わーん！

どこかで誰かが泣いている声がした。

木が茂っている森の中で誰かが一人で泣いている。

葉を寄せて覗いてみるとそこには小さな少女が一人、座りこんで泣いていた。

もう大丈夫だよ・・・

少年は少女に手を差し伸べた。

「マリア様！マリア姫様！どこにいらっしゃるのですか！」

「私はここよロール。皆が心配するからあまり大きな声を出さないで。」

後ろに侍女を二人連れてマリアは自分付きの侍女頭、ロールに返事をした。

「まあ！姫様！またそのような服装をなされて！また馬に乗っておいでだったのですか？」

「ええ、町の様子を見に行っていたの。最後に町の様子を頭の中に刻んでおきたくて・・・。」

マリアがそう言うのとロールの瞳に突然水たまりができた。

「ど！どうしたの！？ロール！？」

「も、申し訳ありません。ですが泣かずにはいられないのです。姫様が7歳の時から12年間姫様だけの事を思い姫様のために尽くしてまいりましたが、まさか姫様が19歳というお若いお年でご結婚されるのだけではなくその御相手が魔界城王子のロシュ様だなんてと思うと涙が出てきてしまうのです。」

そう、私は明後日結婚する、お相手は異世界にあるという魔界とい

う国の王子、ロシュ・ゾーンという方の元へ。
何故こんな事になってしまったかと言うと・・・。

「マリア、そなたは我がミルオン王国が長きの間サギネル王国と対峙しているのは知っておるな？」

「はい。」

「近々その戦いの幕を下ろそうと思うのだ。」

「何か良い案を思いつかれたのですか！」

マリアは一瞬瞳を輝かせた。すると。

バーン！！！！

謁見の間の扉を壊しそうなほどの大きな音が部屋に鳴り響いた。

後ろを振り返るとそこには・・・。

「父上！母上！お話があつてまいりました！」

「ユリアス兄上？」

部屋に入ってきたのは第一王子ユリアス、マリアとは異母兄弟にあたる兄だ。

「父上！母上！どういことですか！悪魔を召喚しようというのは！」

その一言を聞いてマリアは驚いた。

「悪魔」それは人類が生まれる前から存在する人間の邪悪なる部分から生まれたという者達、そしてその力は強大で言うことをきかせることはできず、いったいこれまでに何人の人間が殺されただろう。そのままの意味だ、ユリアス。明日、召喚の儀式を行い悪魔を召喚しその悪魔を使役し我々の代わりに闘ってもらう。」

「使役」というのは言葉のとおり強い魔力を使い悪魔を呼び出しその悪魔を自由自在に操るというもの。

「なぜです！悪魔などの力を借りずとも我がミルオンは負けはいたしません！」

「わしが何も考えず悪魔を召喚するとも思っておるのか。ただ、勝ちたいという気持ちだけで悪魔召喚の儀式を行うとも思ってお

るのか。わしはそなたらがこれから築くであろう未来のためにも戦いに終止符をうつと言うのだ…。」

それを聞いたユリアスは後ずさった。

「父上、ひとつお尋ねしたい。一体どの階級の悪魔を呼び出すつもりですか？」

悪魔には階級といって下級と上級があり下級悪魔は子鬼や邪気のたぐい、上級悪魔は魔神や魔王といったたぐいである。

「上級悪魔を呼び出すつもりだ。」

「！？」

その後兄上と父上の話は続いたが私は何も言えなかった。言いたくなかった。自分は何もできないから。

翌日、東にたたずむ塔で儀式は行われた。魔術師3人と魔石を使った儀式だ。

「ながき眠りにより目覚めよ」

「古の魂を今この手に」

「いでよ。上級悪魔！」

魔術師の声が部屋に響きわたると床に魔法陣が現れた、そして魔力の波動を流し始め悪魔が呼び出された。

そして、突然魔方陣の中から煙が現れ煙がなくなったと思うと魔方陣の真上宙には一人の男性が浮いていた。

『我が名はルミデンド・ゾーン。我を呼び出すのは誰だ』

悪魔の名を聞いた魔術師達は驚いた。

「ルビデンド・ゾーン」とは確か悪魔の世界を支配する王、魔王の名だった。

「魔王が現れた！？」

「なんということだ、強大すぎるものを呼び出してしまったか」

魔術師達が恐れ of 言葉を発していると父上が前に出た。

「魔王ルミデンド・ゾーンよ！我々に力を貸してほしい！長きに渡る戦いに終止符をつけたいのだ！」

魔王はカルオの真剣な気持ちを通じたのかすぐにでも了承した、が。
『ただし、条件がある。そなたの国の姫を我が息子ロシュ・ゾーンの花嫁とする』

それを聞き部屋にいるもの、カルオ・ユリアス兄上・魔術師・私は驚いた、そして、

「花嫁に！？そ、それは。何故ですか！魔王様の血筋に人間の血を混ぜようと言うのですか！」

カルオが言うと

『我々の血は濃い、一人、人間の娘を娶っただけでは血はうすまらぬ。我々魔族は寿命を持たぬ。人間の娘を娶る事で人間界と魔界の関係を深めたいと私は思っている』

それを聞いた兄上が前に出た

「何を馬鹿な！そのような理由で我が妹を悪魔の嫁になどできるものか！」

『ならば力は貸さぬ。諦めよ、人間。』

私は、思っていた。自分は守られているだけで何もできないのか？大切に守られ、城の奥ふかい部屋でひっそりと隠れ住むのか？……いや、違う。私には私なりにできることがあるはずだ。

「構いません。」

その言葉を聞いた者達がマリアの方を向いた。

「魔王ルミデンドよ。私は構いません。私が王子と結婚することでこの国を……ミルオンを助けてくれると約束してくださるなら私は構いません。」

「な！？マリア！お前は自分が何を言ってるのかわかっているのか！」

兄上は怒りまぎれに言ってくるが、私はちゃんとわかっていた。自分が何をしようとしているのかを。

『勇気ある娘よ。そなたの気持ちしかと聞きとめた。婚儀は3日後に取り行う、それまで体を清めよ。』

そう言い放ち魔王はマリアに魔法をかけた、その魔法はマリアの手

の甲に吸いつくように集まって行った。光が収まり甲を見るとそこには印のようなものが刻まれていた。

『それは『印^{イン}』我が一族の加護が婚儀までの3日間そなたを守ってくれるであろう』

そう言い放ち魔王は姿を消した。マリアはそのまま脱力し失神した。

魔法を使う者

眠っている間夢を見た。それは何年も前の夢、今は全然覚えてない記憶の夢。この夢は最近になって頻繁に見るようになった。

「え〜ん！母上〜どこ〜？え〜ん！」
ガサツ・・・

葉が揺れる音がして怯えた少女が後ろに振り向くと少女より2〜3上の年齢に見える男の子が心配そうに見ていた。

「大丈夫？君はどうしてこんなところにいるの？迷子になってしまったの？お家に帰れないの？」

そう質問され少女は何も言わず男の子に寄り添うように抱きつきまた泣き出した。

「・・・め様。ひ・・・様。姫様！目をお覚ましく下さい。」

マリアは侍女に起されたマリアが珍しく寝起きでボーツとしていると侍女が小さく微笑みながら言った。

「姫様もしや、またあの夢を見たのですか？」

（そう、あの夢はよく見る夢だった。ずっとずっと小さい時の夢、相手の男の子の髪も声も顔も何も覚えてないけど何があったのかだけ覚えている夢。そして・・・私の初恋の夢。）

「ええ。」

マリアは小さく答えるとベッドから起き上がりドレスに着替えず乗馬用の服を着た

「姫様？馬にお乗りになってどちらか行くのですか？」

侍女が聞くと

「町に降りるわ。すぐ戻るわね。」

そう言い部屋を後にした。

そして、今に至る。

「ロール泣かないで。それに泣いてしまつてはロシユ様に失礼でしょう？会つた事もない方なのに・・・。」

「何を言うのです！姫様！魔王の御子息ですよ！？外見なんか既に決まっているようなものではありませんか！きつと頭には尖つた角があり牙を見せた口に獣のような爪の・・・それはそれはおぞましい姿なのでしょう！」

ロールは侍女なので儀式の時部屋にはいなかったなので知らないのだろつ。

王子の姿は見なかったが、魔王の姿はどこからどう見ても人間にしか見えなかったのだ。

黒く腰まで垂らされた美しい髪に血のように真っ赤な瞳身長は2mといったところぐらいだろうか。もしあの魔王が町を歩いたならきつと村娘達は釘づけになることだろう。

ロールが言うような角も牙も爪も魔王には存在しなかったのだ。そう考えていると背後から声がした

「マリア」

後ろを振り向くと、そこにはユリアス兄上が心配そうに私を見つめていた。

「マリア。今すぐ城を出よう。」

「え？」

「城を出てずつと南に行こう。魔王に見つからぬ場所に。」

兄上が言いたい事はわかつた、だけど・・・。

「申し訳ありません、兄上。その言葉に従う事はできません。」

マリアは頭を下げた。

「・・・っ！何故だ！何故お前が魔王の元へ行かなければならぬ！お前は戦争には関係ないではないか！」

「兄上落ちつきください。侍女達が困っています。」

マリアの背後にいる侍女達は興奮気味のユリアスにあたふたしていた。それでもユリアスの興奮は止まらない。

「マリア、約束を覚えているか？」

「約束？」

「まだお前が5歳の頃、お前はどこに行ってしまったのか迷子になったことがあるな。その時私や母上、父上は兵に任せず自らの足でお前を探し突如森から泣きながら姿を現したお前を先に見つけ抱きとめたのが私だったな。その時にした約束だ。」

兄上が言っているのは私が毎回見る夢のあとにあったものだ、あの名前もわからない少年に連れられ森の外近くまで行くと少年は「ここをまっすぐ行けば人がいるよ」そう言い後ろを振り返り走って消えてしまったのだ。

「ええ、覚えております。『必ず守る』でしたよね？」

「ああ、私は約束した、お前を何があっても守ると。だから今回もお前を魔界になど連れて行かせん！」

兄上のその優しいところは大好きだった、約束をかわしてからは兄上はずっと私と一緒にいてくれた。怖い夢を見て泣きながら兄上の部屋に行く理由も聞かず横にずれ頭を撫でながら眠ってくれたり、乗馬の練習の時も私を抱きしめるようにして後ろにまたがり直接指導してくれた。だが、今回は仕方のないことだ。

「兄上、私を守りたいとおっしゃるのでしたら国を、国をお守りください。私はこの国と父上、母上、兄上のために魔界に嫁ぐのです。それならば兄上は私が涙を流しながら手放した者達を兄上がお守りください。」

魔法を使う者

それから二日後婚儀の日がやってきた。

婚儀は人間界の我が国で行われる事になった。

私は部屋でドレスに着替えていた。

婚儀のドレスは純白と決まっているが魔界の婚儀のドレスの色は黒らしくマリアは純白ではなく漆黒のドレスに漆黒色のヴェールをかぶらされた。

「さすが姫様ですね！漆黒のドレスもとてもお似合いです！」

涙をこらえながら一生懸命笑顔を作り褒め言葉を言うロールに私も微笑んで礼を言う。

すると、部屋の扉を誰かがノックした。

「誰かしら？兄上かもしれないわね。」

そう言いロールに目をやるとロールが扉を少し開けノックをした人物を見て目を見開かせた。

「ロール？どうしたの？兄上じゃないの？」

私の声に気付いたロールがあたふたとしながら扉を開けるとそこには、鴉の羽と同じ色の髪に血のような真っ赤な瞳身長は185はあるだろうそしてかなりの美貌の持ち主がそこに立っていた。年は2つ上くらいだろうか。

（なんでだろう？なんだか・・・とても懐かしいような気が・・・）

「あなたがマリアか？私の名は魔界城第一王子ロシュ・ゾーン。あなたの婿になる者だ。」

少し低めで透き通った声が自己紹介をしてきた。

「あなたが・・・ロシュ様？私は！」

私も自己紹介しようとするといつのまにかマリアの目の前まで来ていた青年は指をマリアの唇にあてた

「紹介は無用。あなたのことで知らない事はないからな。」

「え？それはどういう？」

私がそう尋ねてもロシユ様は何も言わずただ、フツと微笑んでくれた。

「さあ、行こう我が妃なる娘よ。」

そう言い床に膝をつけ手を差し出してきた。マリアはためらいなく手を取り式場に向かった。

婚儀は無事成功した。

「義父様。これからよろしくおねがいたします。」

最初に魔王を召喚した時の部屋へロシユ・マリア・カルオ・サリナ・ユリアスは行き魔王にあいさつをした。

『約束どおりこの国は守ろう、ロシユよ。この国はお前が守れそれまで城に帰る事は許さん』

「はい父上。」

それを聞いた兄上が叫んだ

「な！どおいうことだ！魔王が国を守るのではないのか！このような力もなさそうな者に国をまかせるくらいなら・・・！」

『ミルオン国第一王子よ。ロシユは私以上の力の持ち主、必ずこの国を救ってくれようぞ。』

そう言い残し魔王は煙のように姿を消した。

「義父様より力がお強い？」

その言葉を言ったのはマリアだった。隣にいたロシユがその言葉を聞くと

「ああ。確かに魔力は父上より私の方が上だろう今は亡き母上が御子だったのだ、しかも相当なる力の持ち主だったと聞いた。」

「え！？御子様ですか！？で、ではロシユ様は半分人間？」

それを聞いたカルオ達が驚きに身体を震わせた。

だが、ロシユはそこから先は何も言わなかった。ただ、何故かユリアス兄上と睨みあっていた。

その後私とロシュは自分達の部屋に戻った。が、私はやはり自分の部屋ではなく大きな寝台の置かれた部屋に家具などは移動されていた。風呂に入り、寝着に着替えロールが髪をすいているとノックがなった。

ロールが嬉しそうに扉を開け

「姫様、ロシュ様ですよ。」

と、なんだか嬉しそうに言った。（さっきまで怯えてたのに・・・さすがねロシュ様・・・）

「入れて差し上げて。」

マリアがそういうとロールは興奮したまま扉を開けたそこには確かにさっきまで一緒にいたロシュが立っていた。

ロシュが部屋に入るなり

「さがれ」

とロールに言くと、ロールは口到手を当てニマニマと笑いながら部屋を出ていった。

「あの、ロシュ様？お聞きしたい事があるのですが・・・。」

「なんだ？」

「あの・・・前にどこかでお会いしたことはありませんか？」

「・・・。何故だ？」

「い、いえ！あの・・・とても懐かしい気がするのです。」

「そうか、だが。会ったのは初めてだと思っぞ。マリア。」

「はい？」

マリアが返事をすると同時にロシュはマリアの傍まで行き抱き上げた。

「キャッ！ロ、ロシュ様！？どうなさったのですか!？」

ロシュはマリアを抱きかかえるとそのまま寝台に向かい、マリアをゆっくりと寝台の上に下ろした。

マリアは意味がわからず周りをキョロキョロし、ある事にきずいた。自分の身体が檻の中にあることに気付いた。マリアの両脇にある少し引きしまった綺麗な腕。体を覆うような広い胸。足の動きを封じ

込めようとする足。

「ロ、ロシュさ・・・ん！」

名前を呼ぼうとすると強引にその唇はロシュのそれによってふさがれた。

強引にされたキスは何故か優しくマリアを怖がらせないようにという気持ちがあるようなキスだった。

「ロ、ロシュ・・・様・・・」

生まれて初めてのキスを体験したマリアは1度のキスで十分幸せな気持ちになっていた。

「マリア、君は美しいな。君のような女性を妻にできた私は幸せ者だ。」

「ロ、ロシュ様そのような事おっしゃらないで。私・・・」

頬を真っ赤に染め両手で頬を隠すマリアを見て、ロシュは何かが身体の内の方から湧き上がってくる感覚に気付いた。

「マリア、怖くは・・・ないか？」

「え？」

「私は・・・魔界の王族だ。人間界の者ではない。そんな者といきなり結婚させられて・・・いきなりこんな状態になって・・・怖くはないか？」

ロシュは悲しそうな表情でマリアを見ている。

「確かに怖かったです。国を守るために呼びだした魔界の王、人間を苦しめるとしてきた魔物達の王である魔王様の御息と結婚・・・確かに怖かったです。始めてロシュ様を拝見した時はつきりしました、ロシュ様の瞳は血の色と同じですが薔薇の色、ルビーの色とても綺麗な瞳をしておいでです。そのような瞳の方がおそろしいなんて、私そんな事もう思いません。それに、もし怖い方なら今そんな事お聞きにならないでしょう？」

マリアは微笑みながらロシュに尋ねた。

「フ・・・どうやら昔も今も変わらないようだなお前は・・・。」

「え？」

「いや、なんでもない。」

そう言いマリアの顎に指を添え今度はさつきとは違う深いキスをマリアにした。

ロシュの口から何か温かい物がマリアの唇をなぞり奥に入ってくる。

「ん・・・ふ・・・」

ロシュの唇がマリアのそれから離れると今度はロシュの唇はマリアの耳へと伝った。その間ロシュの手はマリアの胸の前で止まる

「んっ・・・あっ、あっ・・・」

耳の中でくちゅり、という音が響きマリアの身体がそれに反応するように震える。

「これは嫌いか？」

耳元で囁かれマリアの表情がまた真っ赤になる。そして

「いいえ。大丈夫です。もっと・・・もつとしてください。私はあなたの妻になりたいのです。」

マリアがそう言うときロシュのもう片方の手がマリアの太腿まで流れる。薄布の上から卑劣をなぞる

「んっあっああ!!」

「マリア・・・」

胸を触る手は胸の先端にある尖りを転がす

「ひっ!うっ・・・ん・・・ああ!」

たまに転がすのをやめ尖りに噛みつく

「きゃ!ああ!口、ロシュ・・・さ・・・まああ!」

「マリア、美しい声で鳴くな・・・お前は・・・。もつと鳴かせたくなるよ。」

「ロ・・・シュ様・・・か・・・まいません。もっと、あなたのお気に・・・めすまますに」

そう言いマリアは自分の手をロシュの首の後ろにかけ口づけをした。口づけと同時にマリアの卑劣を守っていた薄布が脱がされ胸にあった手はマリアの足を掴み卑劣の部分を露にした。

「んっ・・・や!口・・・ロシュ様!見ないでください・・・!恥ずか

しい・・・」

「可愛いよ・・・マリア。もう、私のものだ。」

そう言いマリアの濡れた卑劣に口をつける

「きゃああう！あっああ！あっだ・・・だ・・・めえ！あああ！！」

卑劣からロシユの唇が離れるとロシユの下半身がマリアの卑劣に近づく

「マリア、とても痛いかもしれないけど、大丈夫かい？無理なら言ってくれやめるから。」

マリアの頬に優しく触れながら心配をするロシユを見上げマリアは言った

「大丈夫です。私をあなたの妻にしてください。」

「つつ・・・マリア！」

マリアの卑劣が開かれた。温かい筒のようなものがマリアの卑劣を避け入っていく。

「つつ・・・あっ・・・い・・・あ・・・ん」

ロシユの息と汗がマリアの頬に滴りかかる

「くっ・・・！マリア・・・もうちよつとだ・・・」

マリアの胸の尖りを触りながら卑劣の滑りを良くしながらゆっくり入れて行くロシユ

「いつ・・・う、うう・・・ん、あ！ああ！ロ・・・ロシユ・・・様、はい・・・って・・・」

ロシユの物が全て入ったのにマリアはきずいた

「つつ・・・わかる・・・かい？マリア。君は今、私の完全な妻になったんだよ。これからは私が君を守るよ。君も、この国も」

「あっ！ああ！！」

ロシユはマリアの両腿を持ちマリアの中にある筒状のものを出した
り入れたりした。

「あっん！ロ・・・ロシユさ・・・ああ！ん。も・・・も・・・
だめ・・・え！」

ロシユの動きが激しくなるにつれマリアの中で何かが渦巻く感覚が

生まれた。

「あっ！！だ・・め・・ええ！！！」

「マリア・・っ・・マリア！」

「あっあああああああ！」

「・・・っ！！！」

ビクンッとアリスの身体が大きく震えた。同時に得も言われぬ快感に全身が支配される。ロシュの物を咥えこんだ卑劣がきつくきつくそれを絞め付けた。その流れに逆らうことなどできるはずもなく。ロシュはその思いの丈を全てアリスの中に注ぎ込んだ。そうして二人の長い長い夜は終わった。

魔法を使う者

朝、目が覚めるとマリアはロシュの腕の中にいた。

マリアはまだ眠っている頭で昨夜の事を思い出し頬を真っ赤に染めてしまった。すると頭の上から声がした。

「おはよう」

上を向くと悪戯な微笑みを浮かべてロシュがマリアを見ながら笑っていた。

「ロ、ロシュ様！？起きてらっしゃったのですか！？」

「ああ、君が目覚ますすっと前からね。君の可愛く愛らしい寝顔を見ていた。」

「まあ！」

マリアはまたもや頬を染めてしまった。

二人は寝台から身体を起こすと寝着に着替えロシュは「また後で」と言い残し自分の部屋へ帰って行った。ロシュが部屋を出ていくと同時に侍女が部屋へやってきて着替えを手伝ってくれた。

その後着替え終わり髪を結び終わるとまたもロシュが部屋へ迎えに来てくれたので二人で大広間へ移動し朝食をとりに行った。

朝食の席にはカルオ・カルオの妃のサリナ・マリアの異母兄のユリアスが席についていた。

「おお、おはよう。二人とも。ゆっくり眠れたかな？」

「おはようございます、父上。」

「おはようございます、カルオ様」

ロシュは笑顔でカルオに挨拶を返すと席についた

「マリアおはよう。良い夢は見れたか？」

「おはよう兄上。とてもいい気分でした。」

「それは良かったな。」

笑顔でマリアとどのように会話を続けた後ユリアスは睨むような目

つきでロシュを見

「・・・おはようございます、・・・ロシュ様・・・」

「おはようございます、ユリアス殿。」

そんな兄上にも笑顔で挨拶を返すロシュ

（この二人仲悪いのかしら？なぜ？？昨日会ったばかりのはずなのに・・・？）

朝食が終わり廊下を歩いていると

「ロシュ様」

どこからか少し年老いたような声が聞こえてきて足元を見るとそこには小さな子鬼が跪いていた。

「え！？この子は？？？」

「ああ、マリアは見えるようになったばかりだったな。魔界の住人で私の警護の者の一人だ。」

「ど、どうしていきなり見えるように？？？」

「それは・・・昨晚繋がった時にあなたの中に私の気を入れておいたので見えるようになったのだろう。」

そう言われマリアは昨晚の事を思い出し頬を染めてしまった。

「あの、ロシュ様？」

「ああ、それで？用はなんだ。」

存在を忘れていた子鬼が話やすいようロシュは肩膝を床につけ子鬼に近づいた。

「あの、ザギネル王国の事なのですが・・・近々ミルオン王国に攻め入る手はずのようです。」

「そうか、ではそのままばれぬようザギネルの行動を見ていてくれ。あと、私と姫が結婚したことはザギネルの国のやつらは知っているのか？」

「いえ、まだ気付いていないようです。」

「そうか。わかった。さがれ」

その言葉を聞き子鬼はマリアに頭を下げそのまま闇の中に消えてし

まった。

「マリア、父上を召喚した塔に行こう。」

「え？あ、はい」

マリアとロシュは魔王を召喚したときに扱った塔の部屋へと行った。

「ロシュ様？何をなさるのですか？」

マリアが聞くと

「この国に大きな結界をはる。私の結界は魔王であってもやぶることはできない。」

「え！？国を包むおつもりですか！？そんな・・・体力がもちません！」

「私を誰だと思っているのだ？魔王の息子でありお前の夫だぞ？私を信じなさい。」

それを聞きマリアは安心したのか

「はい！あなたを信じます！」

そう言いロシュに口づけをした。

「魔法陣発動！この国に結界を張る！媒介は私魔界の王子の血だ。」

そう言い自分の親指の腹を噛む、するとそんなに大きな傷ではないのに指から血が流れ出る。

「闇に救う者達よ！我に従え！」

ロシュが叫ぶと黒い光の中から死神のような者達が姿を現し一瞬にして姿を消した。

魔法陣は消えた。

「ロシュ・・・様？」

「ああ、大丈夫だ。終わったよ。これでザギネルの者がこの国に攻め入っても中に入ることもできないであろう。」

「ロシュ様ありがとうございます。」

「安心するのは早いぞ我が妻よ。これはただの結界だ、私がお前を妻にもらうと約束する前の約束は戦争を終わらせる・・・だったはずだ。これから忙しく危なくなるだろう。私の警護の者を何人かそなたにつけておく。」

その日の夜、城では結婚披露ということで舞踏会が行われた。
他の国の王にはロシユが何者なのかは伝えず隠し通そうと思っていた。

魔法を使う者

国のお抱えの演奏者が演奏を始め、各国の王・妃はワルツを踊り始めた。（但し、やはり隣国サギネル王国王と、妃は舞踏会には参加してはいなかった）

ロシユは肩膝を床に付き片手を上げマリアにダンスの誘いの合図をした。

マリアは微笑みながら手を差し出し差し出された手の上に自分の手を置いた。

ロシユは立ちあがりマリアの腰に手を回しもう片方の手をマリアの手とつなぎワルツを踊ろうとした。その時だ。

ガシャーーン！！！！！！

ガラスの割れるような大きな音が鳴った、それと同時に女性の悲鳴が鳴った。

「一体なにことだ！！！！」

王カルオが大声を上げ現れた。舞踏会会場には各国の王、ロシユとマリア、そして黒装束の男が何人もいた。ざっと数えて8人だろうか。

「あの黒装束のを着た者の胸にあるマークは！！！！サギネルか！！」

王がそう叫びマリアの前までマリアを庇うように前に立った。

「ロシユ！どういう事が説明を！」

魔王を呼び出した部屋でミルオン全体に結界を張った後二人はその足で王のいる謁見の間まで行き王にそのことを伝えた。

「結界を張ったのではなかったのか！？どういう事が説明しろ！」

「ち、父上！落ちついて下さい！」

王に落ちつくように言うが王は落ちついていない暇はなかった

「説明は後でさせていただきます。今はまずお客様方を安全な場所にお連れしてください。マリア、王に付いて行くだ。」

「ロ、ロシユ様はどうなさるのおつもりですか!？」

「私はこの国をあのサギネルから守らなければならぬ!それがお前と結婚するための条件だったからな。」

「え?」

マリアはロシユが言った言葉に疑問を持った。

(結婚するための)?

それではまるで嫌々の結婚というよりロシユ本人が望んだ結婚のような・・・。

マリアがそう考えていると

「何をペラペラと話している?まあ構わないがな。今日は攻撃というより交渉に来た。」

黒装束の男が一人前に出てロシユに片手を差し出した。

「なんのつもりだ?」

「我々と一緒に来ないか?あなたが誰なのかは理解しています。魔界の王子ロシユ・ゾーン様。我々と一緒にこの国ミルオンを我がものにしませんか」

「はっ、戯言を!我はこの国の姫マリアと結婚し夫となった。それを条件にこの国を救う約束をしたのだ、約束を違える気はない!!」
ロシユがそう叫ぶとロシユの後ろにいるマリアの背後から強い突風が通り黒装束の男の装束を切り刻んだ。

「さ、さすが魔王の息子だ。呪語も唱えずこのような強い風を操るとは・・・。やはり欲しいな、その力。」

「その力必ず我らの王にけんざんしてみせるぞ。こちらには協力者もいるしな、簡単に事は運べるだろう。」

「何?」

黒装束を纏った男の後ろにいた他の黒装束の男の一人がそう言った。その言葉にロシユは反応したのを見て前にいた男が微笑んだ

「今はそれくらいにしておけ、そんなにペラペラと情報を簡単に話すんじゃない。」

「も、申し訳ありません!!!」

後ろの男の一人が怯えたように言った。そして

「マリア姫。」

前にいた黒装束の男がマリアに目をやった。

「話に聞いていたよりも美しいな……。残念なことにあなたは結婚してしまっただけのことだが、私はあなたを諦めたわけではない。あなたのような見目麗しい女性が魔物の手に落ちるのは見たくはないからな。必ずあなたを私の物にしてみせよ。」

その言葉にマリアは首を傾げた。それを見た男は黒装束のフードを外し髪を露わにした。

「かわいらしい動作だな。自己紹介だけしておこう。私はサギネル国第一王子ムール・ミラン。ミルオン国姫マリアよ。あなたは必ずや私の花嫁に迎え入れる。」

それまで待っていてくれたまえ。」

それだけを言い残しムール・ミラン率いる黒装束の男達は舞踏会会場から一瞬にして姿を消した。

話をただ黙って聞いていたロシユは何故かムクレタ顔をしていた。

その後舞踏会は一端中断となり客達、各国の王、妃達は自国へ帰って行った。

その後、王はロシユを謁見の間に呼びだした。

「で、さきほどのあれはどういう事だ？」

玉座に座り玉座のある段の下に肩膝をつき頭を下げているロシユに王は問いかけた

「王、さきほどの黒装束の男達の話によりますと、どうやらサギネル国もミルオンと同じく悪魔を召喚した様子」

「そのような話聞いてはおらん！お主は父である魔王より力があるのではなかったのか！そのお主の力を破ると言う事はお主は本気の力を出し切ってはいなかったのではないのか！」

「申し訳ありません。甘く見すぎておりました。私の力を最大限に使った結界を張らせていただきます」

そう言うとロシユは後ろに向きなおり謁見の間を後にした。

謁見の間に続く扉の前ではマリアがロシユの帰りを待っていた。

「ロシユ様！父上はなんて！？」

「なんでもないよ。心配かけてすまないね。……。」

「ロシユ様？」

マリアが押し黙ってしまったロシユの顔を下から除くように見ると、いきなりロシユに手首を掴まれそのまま誰もいない部屋へと連れて行かれた。

「ロ、ロシユさ……ムゲ！」

名前を呼ぼうとしたマリアの唇を封じるようにロシユの唇が重なる。

「ん……ふっ……。」

初夜以来夜必ずのようにするようなキスをされマリアは立ってるので精いっぱいになってしまっていた。

「ロ……ロシユ……様……？」

「マリア、ムール・ミランという男は誰なんだ？お前のことを気に入っているようだったが？」

「わか……りません。会った覚えもない方でしたが……ん！！」

マリアが最後まで話終わる前にまたロシユの唇がマリアのそれに重なった。

唇を重ねたままロシユの肩膝はマリアの足の間に入り膝の上にマリアを座らせるように片足を上げる。

「んっ……い……いけません！！ロシユ様！！このようなところで！？」

「聞かない」

まるで子供のような表情を見せそのまま片手をマリアの胸に添えドレスを下に下ろし尖りを転がして遊ぶ。

「んっんん……んっ……。」

「何故声を殺す……？こうしても殺してられるかな？」

「ひっあ……ん……んっ！」

ロシユの手はそのままマリアのドレスをめくり布を脱がし卑劣で守

られた穴の中に自分の指を埋めた。

「い．．．やあん！！！ずる．．．い．．．ん！」

「何がずるいのかな？教えてほしいな」

ロシユはそう言うと言卑劣の中に入れて指をもつと奥まで入れ、抜いたり出したりを続け始める。

「あつ！！ああ．．．ん．．．も．．．れ．．．以上．．．」

マリアの言葉を聞き、ロシユはクスツと笑い

「これ以上．．．何？」

愛しい者を見つめるような目をマリアに見せ微笑みながら聞いた

「い．．．じ．．．わる．．．」

「お前は本当に可愛いな．．．昔も．．．今も．．．」

「え．．．？あ！！！！！」

ロシユは両手をマリアの太腿の裏に回し足を持ち上げ卑劣の中に自分の肉筒を押し込んだ。

「あつ！！ああん！！！！あつ！！い．．．ああ！！ん！ん！？」

ロシユはいきなりマリアの唇を自分の唇でふさいだ。

肉筒を出し入れしながら、自分の舌をマリアの中に出し入れする。

「んっ．．．ふっ．．．ん！！！！う．．．あ．．．ん！！！！」

「マリア．．．っ！！！！！」

「あ！！！！ああああ！！！！んっっ．．．」

マリアはそのまま気を失った。

魔法を使う者

「お前は可愛いよ、昔も今もね。」

マリアが気を失う寸前ロシユがそう言ったような気がした。

「ん．．．？．．．あら．．．何故私はベッドに．．．あ！」

ベッドから起きた後少し困惑したが何故自分がベッドにいるのかを思いだし、さつきまで自分がどこでロシユとどんな事をしていたのかを思い出し頬を染めた。

（私ったら気を失ったものだからロシユ様が運んでくれたんだわ．．．あ．．．あんなところであんなことを．．．）

マリアはベッドから身体を起こしそのままベッドから降りようとすると

「え．．．？か．．．からだか．．．うごか．．．ない？」

マリアの身体はそれ以上動こうとはしなかった。すると突然どこからか声がした

『ミルオン国第二王女マリア様であらせられますね？』

だ、だれ！？え！？こ、声が．．．出ない！？

さつきまで出ていたはずの声までも奪われてしまっていた。

『申し訳ありません。騒がれてしまつては少々面倒な事になりかねないので声は奪わせてもらいました。ご了承ください。』

そう言うつと寝室の隅の暗闇から黒装束の胸にはサギネル王国のマークが施されたバッジが飾られている男が足音を立てずに歩き姿を現した。

『マリア様にお願いがあつてまいりました。』

黒装束の男はそう言うつとマリアのベッドの傍に立ち

『我が王国。サギネル王国第一王子ムーン・ミラン様がマリア様をご所望ですので私と一緒にサギネルまで来ていただきます。申し訳

ありませんが拒否権は差し上げることではできませんのでご了承ください。」

男はそう言つとマリアの布団をはがし、寝着姿のマリアの背に片手を両足の膝の裏にも片方の手を通して抱き上げ小声で意味のわからない言葉を告げるとマリアの身体に急に眠気がおとずれた。

その頃ロシユは魔王召喚の時使われた塔の部屋にいた。

「魔界に住みし古の精霊達よ我は魔界国第一王子ロシユ・ゾーン、今我の前に姿を現し我に従え。」

自分の手に剣で傷を付け血で床に魔法陣を書くとロシユは何やら言葉と話始めた。

ロシユが言葉を言い終わると同時に頭の上で光輝く物が出てきた
『ロシユ・ゾーン様、古の契約のためはせ参上いたしました。命令をどうぞ』

光の中から低い声が鳴り響き

「この国、ミルオン王国の周りに結界を張り他の者の侵入を許すな」
そう言つと「御意」とだけ告げ光は消えた。

部屋の隅でそれを見ている者がいた、ミルオン王国第一王子でマリアの兄のユリアスだった。

ユリアスはロシユがいつかミルオンを裏切りサギネルに付くだろうと決めつけ魔法を国にかけるところを見ていたのだった。

「今のはどのような魔法をかけたのだ」

ユリアスが聞くとロシユは後ろに踵を返しユリアスの方を見て言った
「魔界に住み古くから私の一族に付き従っている魔神を呼び出しこの国全体に結界を張らせました。結界と言ってもその結界は特別なものでその魔神自信が姿を変えて結界の姿に変形したものなのでもしも結界を破るような事があつたり、通り抜けされたりすることがあればすぐに私のところに知らせが来るようになっていきます。」
それを聞くなりユリアスは不機嫌そうな表情を緩める事なく何も言わず踵を返しその場を後にした。

「さて、そろそろ MARIA が目を覚ますな。王のところには MARIA と赴く事にしよう」

10 年前魔界の森を狩りと称して探索していた時、どこからか鳴き声が聞こえてきた事がある。俺は鳴き声を辿り森の奥に進んで行く。と鳴き声が近くなつたところに人間界へ行くためのひずみが開いてしまっていた。それより少し歩いたところから鳴き声は聞こえていて俺は葉をどけ鳴き声のするところを除くとそこには一人の少女が座りこみ両手で顔を覆って泣いていた

俺の中で何かが一瞬ドキリと鳴つたがその時の俺はまだ幼くそれが恋とはわかつていなかった。その少女の名は「MARIA」人間界にあるミルオンという国の王女だと言う事がわかるとそのまま彼女の手を握りひずみまで連れて行った。

ひずみの中に入り森がもうすぐで終わるところで俺は MARIA の額に手をかざし魔界での記憶を全て奪い彼女の背を押し、そのまま姿を消した。それから 10 年間の間俺は「あの時の少女は元気にしているだろうか?」「見たところかなりの泣き虫だったが、また迷子になっていないだろうか?」「今頃何をしているのだろうか?」

と少女の事を考え時はなかった。そんな俺を見て魔王は息子のためにとでも思つたのだらうちょうど召喚で呼び出しをされた時自分自身が赴く事を俺に告げ人間にあつさり召喚されやがった。そして俺は良いと言っていないのに勝手に条件なんか出しやがった。

だが、そのおかげで俺はまた MARIA に会えた。もう MARIA の悲しむ顔は見たくない。俺が絶対に彼女を守ってみせる。

そう決意しながらロシュは塔を後にし MARIA の眠る寝室に向かった。

その頃サギネル王国では

「ん・・・ここは・・・?」

私今まで何してたのかしら?えっと・・・ミルオンのベッドで目を

覺まして身体を起したらそれ以上身体が動かなくて・・・っ！？
マリアは自分が今どこにいて何があったのかを思い出し身体を起こした。どうやら術は解け身体も動くし声も出るらしい。

「ここは一体・・・？誰の寢室なのかしら・・・」

マリアが不思議がつて部屋の中をベッドの上から見渡しているとコンコン

部屋の扉をノックする音がしてマリアの身体はビクついた。するとマリアの返事を待たずに扉を開けたのは、舞踏会の日の夜マリアやロシュ・コルタンやユリアスの目の前に現れたムール・ミランだった。

「目が覚めたんだね。」

そう言いながら彼はベッドに近づきベッドの横に置いてある椅子に腰かけた。

「手荒な扱いをしてしまつてすまないね。どうしても君と話がしたくて、部下に君をここに連れて来るように頼んだんだよ。」

「あなた様とお話することはありません。あなたの国と我が国ミルオンは敵対しているのですから何を話すと言うのですか？」

マリアがムール・ミランの言葉に即座に答えると

「そんなに怒らないで。あなたにそんな顔似あいません。あなたにお願いがあるだけなのです。」

「お願い？」

対、ムール・ミランにされた問いかけに答えてしまつとマリアは即座に手を口にあてる

「ええ、あなたにはロシュ・ゾーン様と別れていただきたいのです。そしてこの国に妃として来ていただきたい。もちろん私の正妻としてね。」

それを聞いたマリアは目を見開き口を動かし言葉を絞り出した。

「な、何を仰っているのかわかりかねます。私にロシュ様と別れて敵国に嫁げとおっしゃるのですか？」

マリアがそう聞くとムール・ミランは頷いた。

「はい。あなたの父、カル才陛下は両国の戦争にけりをつけたかったから魔王を召喚し、そして魔王から出された条件をのんだのでしよう？ならば、魔王に助けなどこわす両国の王子と王女が結婚すれば二つの国は合体し今までより遙かに大きな物となりましょう。それに、そうすれば戦争する理由もなくなるのでは？今すぐ戦争をやめさせるにはそうするしかないと思うのですが」

確かにそうだけど・・・

だが、マリアには答えを考える理由はなかった。

「申し訳ありませんが。そのお話お断りさせていただきます。」

「！？な、何故です！？」

ムール・ミランは驚いたようにマリアに聞き返した。

「私はもう既にロシュ様の妻、そしてこの戦争をロシュ様は終わらせてくれると約束してくださいました。私はロシュ様のそのお言葉を信じたいのです。それに・・・」

マリアはそこで言葉を止めると瞳を閉じて続きを話した。

「それに、何故かロシュ様とは初めてお会いした気がしないのです。昔・・・幼い時に会った事があるような・・・そんな気がするのです。もしその記憶が本物ならあの方は悪魔などではありません。とても清んだ美しい心の持ち主だと、私は思います。なので、このお話お受けできません。申し訳ありません。ムール様」

マリアはそう言うベッドの上から頭だけ下に下げて礼をした。

「そうですか・・・それでは最後に会ってほしい方がいるんです。」

「会ってほしい方？」

マリアがそう聞き返すとムールは頷き扉の方を見た。

「どうぞ」

ムールがそう言うと同時に扉が開いた。そこに立っていたのは外見がとてもロシュとそっくりな青年だった。

青年は扉を閉めてから扉の前で一礼をしてからベッドに近づいてきた。

「マリア様、この方に見覚えは？」

「ロシュ・・・様に、似ていらつしやいますね」

マリアがそう言うつと青年は頷き

「はじめまして。私の名はウィリアム・ゾーンと言います。外見が似ているのは私が彼の従兄弟だからでしょう。魔力はロシュの方がはるかに上ですが年は彼より上です。」

「ロシュ様の従兄弟が何故このようなところにいらつしやるのですか？」

マリアがそう言うつと何故かウィリアムの横にいたムールが質問に答えた。

「我が国もミルオンと同じく召喚を行ったからですよ。魔力はロシュ様の方が上かもしれませんが、こちらにはウィリアム様とあなたがあります。この国は元々魔法の国ですし魔力の違いなどどうにでも求には逆らえないでしょうしね。」

ムールのその言葉を聞きマリアはムールの方を睨むようにして見つけた。

「どういう意味ですか？私をおとりにしてもロシュ様はこの国の言う事を聞く事は絶対にありえません。」

「ほお？それは何故です？」

「ロシュ様は・・・私を愛していないからです。元々この結婚は魔王様が我が国ミルオンを守ってくれるための条件だったからなのです。なので、ロシュ様は私を助けには来ません。」

マリアがそう言うつとウィリアムが瞳を閉じ

「マリア様。あなたはどうかやらロシュ様と会ったのは結婚式当日がはじめてだと思いのようですね。申し訳ありませんが、初めてではありませんよ。」

ウィリアムのその言葉を聞きマリアは目を見開いた。

「え・・・？」

「10年前、あなたは魔界に行かれた事があるのですよ。あの時ロシュ様と私は森で狩りをしていました。その時どこからか泣き声が

してきたのですよ。ロシユは一人で泣き声の元を探すと森の奥へ入って行きましたが私は心配だったので隠れて後を付いていったんですよ。そして、ロシユを見つけた時傍には一人の少女がいたんですよ。名は「マリア」と名乗ってましたね。あなたの事ですよ？ロシユはその後あなたを人間界に帰しあなたの魔界での記憶を消して森から出してましたよ。」

「・・・それでは・・・それでは・・・あの時の少年はロシユ様だとしてもおっしゃるのですか・・・？」

驚きを隠せない表情でウィリアムに問う

「ほう・・・記憶を消す魔法はどうやら失敗していたようですね。あなたの中にはロシユ様と会った時の記憶がまだあると？まあ、それで結婚につながったのかは知りませんがね。」

マリアはその言葉を聞き手を口元に運んだ。

あの時の少年がロシユ様・・・それなら・・・私の初恋の相手は・・・！？口、ロシユ様って事！？

マリアが驚いた状態でいるとムールが話しかけてきた。

「よくわかりませんが。お話は終わりましたか？まあ、そういうことですのであなたにはしばらくこの城に滞在していただきます。そしてウィリアム様がロシユ様を抹殺した後、私とあなたの結婚式をあげましょう。」

ムールはそう言うとマリアの答えを聞かずウィリアムの方を向き何も言わないまま頷いた。すると、ウィリアムはマリアの枕元までやってきてはマリアの額に手を当て何やら呪文のような物を小声で唱えた。すると、マリアの視界が段々暗くなりそのまま後ろに倒れてしまった。

口・・・シユ・・・さま・・・

魔法を使う者

その頃ミルオン城ではマリアが消えた事に侍女達は慌ただしくしていた。

謁見の間ではコルタン・ユリアス・ロシュが話しあいをしていた。

「マリアが消えたとはどういうことだ！――！」

そう叫んだのはコルタンではなくユリアスだった。

「まだわかりません。1～2時間ほどマリアの傍を離れていましたらマリアが部屋から消えていまして。侍女達に城の中を探させましたがどこにもいなく、国全体を魔力で探しましたが。マリアの気配がどこにも見当たりませんでした。もしかすると、結界を張る前にサギネル国の者に誘拐されたのかもしれない。」

「「されたのかもしれませんが」では解決したうちには入らないのだぞ――！ 自分の妻一人守れぬ男が国1つ守れるのか――！」

ロシュの後に叫んだのもまたユリウスだった。ユリウスは両手を握りしめながら立ちあがりロシュを睨みつけていた。

「申し訳ありませんが、今は言い争いをしている時間はありません。早く……早くマリアを助けなくてはなりません。それでは私はこれで。」

ロシュはそう言うと言席を立ち踵を返し扉から部屋を出て行った。

「父上……お願いがあります……」

ロシュが出て行った方を見つめたままユリウスは後ろの席に座っているコルタンに問いかけた。

カツ、コツ、カツ、コツ

暗い廊下をムールとウィリアムが歩いていた。今しがたマリアに催眠術をかけてきたとろだ。

「これで良かったのですか？ムール様」

「何がですか？ウィリアム様」

ムールはウィリアムの問いに応えるべくその場で立ち止まり後ろを振り返った。

「今は催眠術で寝かせている状態ですが。あなたはさっき仰っていましたね、「ロシュを抹殺してマリアと結婚する」と、ですが私が見たところマリア様はロシュを抹殺しても悲しみが増えるだけであな様とは結婚しないと思われるのですが・・・もし、結婚することがお望みなら私がマリア様の部屋へ戻りロシュ様でも解けぬ魔法がひとつありますのでそれをおかけしましょうか」

「ロシュ・ゾーンでも解けぬ魔法？」

「はい。人の心を闇が蝕み術をかけた者の意のままに操る事ができる魔法、その魔法をかけマリア様をミルオンに返しマリア様の口からロシュに別れを告げさせ、その後マリア様にかけた魔法を解けばロシュは自分を嫌いになつて城を出て行かれたのだと勘違いしてロシュの別れを受け入れるのではないでしょうか。ロシュ抹殺はその後でも良いのでは？」

それを聞いたムールは一瞬目を見開いたがすぐに下を向きフフッと笑い。

「さすがは私が召喚した悪魔だな、あの魔王の息子より悪魔に近い存在だ。」

「お褒めにいただき誠にありがとうございます。」

ウィリアムはそう言い胸に片手を当てムールに礼をした。

そしてその場を後にし、今まで歩いてきた廊下をまた戻って行った。

マリアはその頃ベッドで眠っていた。

（・・・リア？マ・・・ア？マリア？どこだ！？）

（誰かが私を探してる・・・？誰？あなたは・・・誰なの？）

（マリア・・・どこにいるんだ・・・。俺のマリア・・・幼い頃守ると決めた幼い姫君・・・マリア・・・どこにいるんだ！？お願いだ・・・返事をしてくれ！マリア！）

（私は・・・ここよ。私はここにいる。はやく・・・助けにきて・・・

・ロ・・・シュ・・・様・・・)

マリアがロシュに手を伸ばそうとしたら目が覚めた。

「おはようございます。マリア様・・・と言っても、先ほどあなたを寝かしてからあまり時間はたっていないので今はまだ夜ですけどね。」

「・・・何かまだ御用がおりなのですか？」

マリアの問いに答えずウィリアムは何か呪文を唱えた。すると紅い光が飛び散り、ウィリアムの手には杖が現れた。

「・・・何をなさるおつもりですか・・・」

ウィリアムが杖を出したところを見て何か魔法を唱える事を悟ったマリアはウィリアムを睨みつけた。

それでもやはりマリアの質問には答えず、ウィリアムはマリアの額に指をあてた。するとマリアの身体が金縛りにあつたように動けなくなってしまった。

そして杖を掲げ呪文を唱え始めた。

その後マリアの目の前は真っ暗になりまた眠りについた。

「・・・さて、どう出る？ロシュ」

その頃ミルオンでは、魔王召喚に使った塔の部屋でロシュは床に魔法陣を描き呪文を唱えていた。それは前に魔術師達が魔王召喚に扱った呪文だった。

ロシュが呪文を唱え終わると黒い煙が現れ、煙が消えたらその中にはロシュととても外見のそっくりな年齢は20代前半ほどの男性がそこに立っていた。

『どうした？ロシュ。』

「父上、最近魔族で誰が行方不明になつてはいませんか？」

『行方不明？・・・ああ、ウィリアムが突如姿が消えたという話は聞いたな。だがあやつはお前の1つ下にあたるほどの魔力を持つ者探索なんかせずとも勝手に自分から帰ってくるだろうと公にはしてはいないのだが？』

「ウィリアムが・・・」

『どうかしたのか?』

顎に手を当て考えこんだ息子を見て心配した魔王は王子の前まで歩み寄り質問した。

「・・・どうやら敵国のサギネルも悪魔召喚を行ったようなのです。そして・・・、そして、マリアが何者かに誘拐されました。」

『なんと!? まことか!? 探したのか?』

「いえ、まだです。しかし目星は付いているので・・・」

『・・・ロシュよ。これを』

そう言い魔王が手を前に差し出すと手の上が紅く輝きその中には一つの小さい瓶があった、その中には赤い液が入っていた。

「・・・これは?」

『何か困ったことがあれば使いなさい。必ず助けしてくれるはずだから』

そう言い魔王は姿を消した。

ロシュはその瓶を握りしめ部屋を出て行こうとしたら

「ロシュ様!!!」

ロシュ付きの従者が慌ただしく部屋に入ってきた

「どうした。騒々しい。」

「も、申し訳ありません。で、ですが! マ、マリア様が! マリア様が帰っていらっしやいました!!!」

従者の言葉を聞き、いてもたってもいらなくなったロシュはその場を後にし走って謁見の間まで行った。

バーン!!!!!!

大きな音をたて謁見の間の扉が開けられた。

「マリア!!!」

謁見の間、王座の前には一人の少女が床に膝を付き王に頭を下げていた。

ロシュの言葉に反応した少女は立ちあがり後ろを振り返った。その

少女はマリアだった。

「ご心配おかけしてもうしわけありませんでした。ロシュ様。ただ今戻りました。」

マリアはそう言い微笑んだ。

ロシュがマリアに駆け寄り抱きしめようとすると

「マリア！！無事だったのだなマリア！！！」

ロシュより先にユリアスがマリアを抱きしめた。

魔法を使う者

「兄上もただ今帰りました。ご心配おかけしてもうしわけありませんでした」

マリアは兄の腕に抱かれたまま兄の顔を見て微笑んだ。

行き場をなくしたロシュの手は肩手は下ろし、片手は口元に運ばれコホンと一つ咳をした。

「して、マリア？今までどこに行っていたんだ？」

ユリウスとマリアとの話を聞いていたコルタンが話しかけた。

「はい。サギネル王国第一王子ムーン・ミラン様と自らの足でサギネル王国まで行っていました。」

「な、なんと！？何故お前がサギネルに行くのだ！」

「話があるだけだと言われたもので。父上、私からもお話があります。」

「な、なんだ？」

「・・・」

マリアはしばらく目を閉じて下を向いていた。

「父上、ロシュ・ゾーン様との結婚なかったことにさせていただきたいのです。」

「！！！？その言葉を聞いた謁見の間にいた者達全員が驚きの声をあげた。」

「ま、マリア！？どういうことだ！？」

一番最初にマリアに問いかけたのはロシュだった。

「どうもこうも、魔王召喚自体をなかったことにしていただきたいのです。」

「自分が言っている事がどういう事かわかっておるのか！？」

次に問いかけたのはコルタンだった。

「わかっております。私はムール・ミラン様を結婚致します。」

「何！？」

「この結婚は戦争をなくすためというものでしたら私とサギネルのムール様が結婚すれば国は合体する事になるでしょう。そうすれば戦争がなくなるだけでなく国が合体しさらに大きな物になるかと思われるのですが？」

「・・・むう・・・」

コルタン王は玉座に座り考えこんでしまった。

「マリア・・・」

「申し訳ありません。ロシュ様。ですが、私決めたんです。あなたと別れてムール様と結婚します。」

マリアは微笑みながらロシュにそう言った・・・が、その瞳に光はなかった。

瞳に光がないことに築いたロシュは少し怒ったような顔をした。

ロシュはそのまま目を閉じた。

『ここは・・・どこ？暗い・・・怖いよ・・・ロシュ様・・・あれ？ロシュ・・・って誰だっけ？え？わたし・・・も誰？怖い・・・私は誰？ここはどこ？怖いよ・・・怖いよ・・・』

『・・・リア・・・マ・・・リア・・・マリア』

『誰かの声・・・？誰？マリアって？』

『私の名はロシュ。魔界国第一王子ロシュ・ゾーンだ。マリア、私が見つからないのか？』

『ロ・・・シュ？魔界国？わ・・・わからない！わからないの！！！』

少女はそのまま手を顔にあて泣きだした。

『マリア・・・泣くな。泣かないでくれ。私はお前の泣き顔なんか見たくない・・・。私は・・・私は、お前の笑顔が見たいんだ』

そう言いロシュはマリアを抱きしめた。

『（どうしてだろう・・・この人の胸の中は暖かくて・・・とても懐かしい・・・私・・・この人を知って・・・る？昔・・・会った事がある・・・あれは・・・いつ？？そうだ・・・私がまだ・・・小さい時・・・森で迷子になって、助けてくれた男の子も私の事抱きしめてくれた。あの子と同じ感じがする・・・）』

すると、突然ロシユの腕の中のマリアから光が放出された。

そして現実世界のマリアとロシユは気を失って倒れた。

「マ、マリア!？」

「な、何事だ!」

何が起きたのかわかっていないコルタンとユリアスは茫然するばかりだった。

その後、ロシユとマリアは寝台に運ばれた。

「・・・う・・・」

最初に目を覚ましたのはロシユだった。枕元にはユリアスがいた。

ユリアスは開口一番に

「貴様マリアに何をした?」

と言った。

ロシユは横になった状態のまま

「操られている状態だったのでマリアの心を救っただけです」

と答えた。

「操られていただと?」

「はい」

「・・・詳しく話せ」

「魔王に聞いたところ私の従兄弟が行方不明になっておりまして。

おそらくサギネル王国も悪魔召喚を行い私の従兄弟を呼んだのかと

そしてマリアを誘拐してあっさり返すと言う事は相手国は私が一番

苦手としてて従兄弟が得意としてる魔法をマリアにかけると思った

のです」

「それが人を操る魔法なのか?だが、お前は苦手なのだろう?それ

ならばどうやって助けたと言うんだ」

ユリアスは怒った表情をかえることなく聞いた

「確かに苦手ではあります。この魔法を解くための魔法は知りませ

ん。何故ならその魔法を解くための魔法は相手の心を壊して救うと

いう手段しかないからです。なので私は彼女の心に入り込み、心自

信に話しかけてみたのです。そして、成功しました。」

「で、では！？」

それを聞いたユリアスはやっと表情を緩めた。

「はい。元のマリアに戻り、心も壊れていません。今までどおりのマリアです。」

「そ、そうか・・・そうか・・・あり・・・が・・・とう。ありがとう口シユ。我が愛する妹を救ってくれて感謝する・・・」

ユリアスはそう言う口シユの手を掴み頭を下げた。

「我が妻を救ったまでのこと。お気になさらず。マリアのところへ行つてあげてください。」

ユリアスは口シユの手を離し部屋を後にした。

部屋には口シユただ一人になった。

「そこにいるのだろうか？わかつているんだぞ、結界に穴が開いたかな」

口シユがそう言う口寝台前の何も無い空間から口シユと外見がそっくりな男性が姿を現せた。ウィリアムだった。

「・・・やはり人間界にいたのだなウィリアム。」

「ああ、だって魔界を継ぐ者であるお前が人間の少女に恋をしたと聞いたからね。どんな女が確かめてみたかったんだよ。でも、まあ・・・クス・・・お前趣味かわったな。昔はもつと柄のいい彼女ばかり周りに歩かせていたのに、今ではあんな餓鬼っぽいしすぐ泣くしめんどそうだ。昔のお前の趣味のが俺は好きだったよ。」

「お前には関係のない話だろう。それにマリアの良いところは私やマリアの家族が十分なほどに知っている。」

「関係なくもないだろう？お前も私も次期魔王候補なのだからな。将来魔王になるものが人間の女に恋など考えられない事なんだぞ」
ウィリアムは腕組みをしながらそう言った。

「ウィリアム、マリアに魔法をかけたのはお前だな？」

「ん？なんでそう思うんだ？」

「私の苦手としての魔法を知ってるのは俺の従兄弟で幼馴染であるお前か現魔王だけだ。」

「そうだっけー？まあ、もしそうだとしても俺には関係ないね。」

「私の妻に魔法をかけたのだぞ？関係ないわけがないだろう。」

「俺がかけた魔法は確かに心を操るものだが、あの魔法は心に悩みなどを持っている者にしかかからない、ってことはあの女は何かしらの悩みや闇が心の中にあるってことだぞ？その悩み、お前にはわかってるんじゃないのか？ロシュ」

「・・・・・・・・」

ウィリアムの言葉にロシュは黙ってしまった。

魔法を使う者

（わかってるさ。わかっていると。マリアは無理やり私と結婚させられただけだ。俺には・・・あの時の記憶もあり俺一人だけの目惚れだったんだ。それなのにその自分の好きになった女を無理やりに自分の物にしてしまった。マリアは・・・さぞや悲しんだだろう。きつと好きな男だったはずだ。それに、私は魔王の息子で魔界の王子だ。人間のマリアが私を怖がらないはずがない・・・）
「わかって・・・いるみたいだな。ってことわだ。彼女が操られて言った言葉は本音ってことだぞ？お前はあそこまで言われても彼女を手放さないつもりなのか？それで彼女が幸せになれるとでも？」
ウィリアムはロシュに詰め寄った。

ロシュは下を向き悲しそうな表情を見せていた。

「お前なら条件をなくして彼女を自由にできるはずだ。彼女の幸せを思うなら彼女から手を引け。」

ウィリアムはわざと心配しているという表情を作りロシュを見つめた。

「・・・俺はー・・・・・・・・・・」

「う・・・・・・・・ん」

「マリア？マリア！私がわかるか！？マリア！」

「あ・・・・にう・・・・え？」

その頃ちょうどマリアが目を覚ました。

「ああ、私だ。ユリアスだよ。マリア。良かった。無事目を覚ましてくれたのだな。どこか痛いところはないか？気分は悪くないか？」
ユリアスに色々質問されまだ完全ではない頭を働かせ問題がない事を確かめた。

「大丈夫です、兄上。あの・・・私は今まで何を??」

「覚えていないのか？」

「はい……。サギネル王国の一室にある寝台の上で気を失ってからの記憶がなくて……。どうして今ここにいいのかさえ……」

「そうか、そうか。いいんだ。無理に思い出さなくていい。お前が無事だったならそれだけで……」

ユリアスはマリアに優しく微笑んで見せた。そしてマリアをそっと自分の胸の中に入れ抱きしめた。

マリアは記憶がなくなるともユリアスのこの状態で自分がユリアスにとっても心配をかけてしまったことに築きユリアスの腕を避けずそっと瞳を閉じユリアスの胸の中へと収まった。

しばらくしてユリアスが腕の力を緩めるとマリアは瞳を開けた

「あの……。兄上？」

「どうした？」

「ロ……。ロシュ様は……。どこに？」

「……。寝室にいるよ。」

「そ、そうですか。」

そう言いマリアは寝台から降りようとした

「もう動いて平気なのか？」

ユリアスが心配そうにマリアの両肩に手を添えてくる。

「いっぱい寝ましたから。平気です。」

マリアは心配させまいと笑顔でそう言った。

それを見たユリアスはホッとしたようにマリアの寝台から離れた。

マリアは寝台から降り立ちあがると

「あの、兄上。私、ロシュ様のところへ行ってまいります。」

「行ってらっしゃい。無理はするなよ？」

「はい！」

マリアは微笑みながら返事を返し、ユリアスに一礼すると部屋を出て行った。

（眠ってからの記憶はないけど……。その前のものならある……。ウィリアム様は確かに言ったわ。ロシュ様はあの時の男の子だと。

もしそれが本当ならロシユ様は・・・)

そう心の中で呟いてマリアは足を止めた

「うつん……。ロシユ様が誰であっても関係ないわ。私はロシユ様が好き。それだけはまぎれもない事実よ」

そう言いながら胸の前まで腕を上げ手をグッと握った。

コンコン

ロシユの部屋内にノック音が響き渡った。

しばらくして「はい」という声が聞こえマリアは扉を開けた。すると、ベッドで身体を起こしているロシユを見つけたマリアは驚いた表情で寝台に駆け寄った

「ロ、ロシユ様！？どこかお悪いのですか！？何かの御病気ですか！？」

そう聞いてくるマリアをロシユは見やった後

「いや、大丈夫だ。少し立ちくらみをしてな。もうすっかり元気だ。」

それを聞くなりマリアはホツとしたように胸にあてていた手を撫でおろした。

「あ、あのロシユ様・・・」

「マリア」

「は、はい！」

質問しようとしたマリアの言葉をロシユの声が遮った。ロシユは真剣なまなざしをマリアに向けていた。

「悪いのだが・・・別れよう」

「え・・・」

「条件を無しにしようと言っているんだ。そのかわり、召喚されたのに違いはないからな責任を持ってこの国は守らせてもらう。構わないか？」

「な、なぜ、そのような事をいきなり仰るのですか・・・？」

マリアは同様に隠せないままに聞いた。

「別に理由などない。疲れてしまったのだ。遊び半分で人間と結婚

してみようと思ったが、人間はめんどろな生き物だ。魔法も使えないし、心も弱い。そんな者達と一緒にいてもいいことがないとわかったんだ。・・・っ！」

そう言いながらマリアの方を見ると、マリアの瞳からは涙が流れていた。

「そ、そういうことだ。だから私は魔界に帰らせてもらう。この国には結界を張ってある。私が生きているかぎりサギネルの者はだれ一人この国には入れないだろう。それでは、さようなら」

そう言い残しロシュは姿を消してどこかへ行ってしまった。

「ロ・・・シュ・・・様・・・っ！！！」

マリアはベッドに頭を伏せ声にならないほどの泣き声を出した。

マリアの帰りが遅い事に心配したユリアスはロシュの部屋へと向かっていた。すると、暗闇の中からマリアが歩いてくるのが見えてユリアスはマリアに駆け寄った。そして目にした物を見て安堵した。マリアの頬には泣きじゃくった後で真っ赤に腫れあがり、瞳には一寸の光も存在してはいなかったからだ。

ユリアスは何があったのかは聞かずそのままマリアをまた自分の胸の中で抱きしめた。

抱きしめられた事にもきづかずマリアはそのまま立ちどまっていた。

（「さよなら」）

マリアの頭の中ではロシュが最後に口にした言葉がこだましていた。

「マリア姫はどうしたロシュ。」

ロシュは魔界城に帰ってきていた。帰ってきている事に案じた魔王はロシュに聞いた。

「お前がここにいてるってことはもしか、マリア姫も魔界にいるのか？」

「父上、マリアとの結婚なかったことにさせていただきます。」

「・・・なぜだ？望んでいたのではないのか？」

ロシユは魔界城の謁見の間、玉座の置いてある段の下で肩膝を付き頭を下げ王にマリアとの結婚なかったことにさせていただけないかところを垂れていた。

「私は・・・父上のお察しのとおりマリアが好きでした。」

「であろう？だからわしは召喚されたことを良い事にあちらの王に結婚という条件を出したのだぞ？」

「はい。ですが、それではマリアの意思はどうなるのでしょうか・・・『条件』などというもののために魔界の人間に嫁がされるマリアの意思は・・・」

「・・・」

魔王はロシユの言葉を聞くなり押し黙ってしまった。

ロシユは何も言わない魔王を背にして謁見の間を出て行った。

（これでいいのだ・・・これで・・・）

自分にそう言い聞かせていた。

「マリアの調子はどうだ？」

謁見の間にある玉座に腰をおろしていたカルオは心配そうにロールに聞いた。

「はい・・・何も食べたくないただけ仰ってお部屋に籠っておられます・・・」

ロールは心配していた。姫が幼い時から傍にはいたがこのような事初めてで困りはててしまっていた。

「ロシユ様は見つかったか？ユリアスよ」

ロールの横には同じく肩膝をつき頭を下げているユリアスがいた「それが・・・城の中だけでなく町の中も探しましたがどこにもいませんでした・・・。あいつ・・・！マリアに一体何をした！！

！！」

ドカツ！！とユリアスは床を殴りつけた。

するとユリアスの前、何もない空間から光が溢れだし、その中から魔王が姿を現した。

「ミルオン王国王カルオよ。話があつてまいった」

「魔王様！ロシユ様が消えてしまわれてしまいました！もしか、この国は救う価値がないということですか！？」

カルオは立ちあがり魔王に聞いた

「いや、この国にはいまだに息子、ロシユの結界がかけられています。話というのはロシユとマリア姫の事についてです」

「姫の？」

「ええ、このたび、私がそちらに差し出した条件を無にして二人の結婚をなかつたことにさせていたきたい」

「！！！？？」

その場にいた。カルオ・ユリアス・ロールがそろって驚いた。

「我が息子。ロシユは・・・とても優しい子なのです。時期魔王候補でありながらに自分の事より相手の事を思ってしまうほどに・・・

。ロシユは、マリア姫を『条件』という言葉だけでしばらくつけてしまうのはあんまりだと言いました。一人の人間の幸せも守れないのでは一人の妻の『夫』にはなることはできないと・・・なんと馬鹿げた事を言い出しました。」

「・・・・・・そ、それでは。この国と隣国サギネル国との長き戦いを終わらせるにはどうすればよいのですか？？結界を張っているだけでは戦いが終わつたとは言えません。それではあくまでこの『国と城』を守っているだけです。国の周りにある自然は罪もないし守る事はできません。」

「聞いたところによれば、サギネルにもマリア姫と年の近い王子がいらつしやるそうです。」

「・・・・それが？」

「サギネル国第一王子とこの国の姫を結婚させれば国は合体し今まで以上に素晴らしい物となりましょう。それに、その方がマリア姫も幸せかと・・・っ」

言いきる前に魔王の元に剣が飛んできた。魔王は何もないようにヒラリと剣を避け飛んできた方を見やるとそこにはユリアスがいた。

「ユ、ユリアス！な、なんということをするんだ！ここにおられるのが誰なのか知らないわけではないだろう！」

カルオは驚き目を見開いたまま玉座のある段から降りてきた。

「わかっております。わかっておりますが……魔王の言葉を聞いていたら怒りを抑えきれず……」

「何か意見があるのなら聞こう。」

魔王はそう言った。

「あなたは今、マリアにはマリアの意思があると言いましたね？」

「ああ」

「でしたら、何故マリアは今部屋に籠りこの2日間何も飲まず食わずなのですか？それに私がマリアの帰りが遅い事を案じてロシュ様の部屋へと迎えに行った時マリアは瞳から光を失い声までも失ったような状態でした。そして頬には涙の後があつたのですよ？私は・

・マリアがまだ幼い時約束しました。『何があつても守る』と。あの子はその約束をしてから私や父上に心配させまいと毎日笑顔を絶やさず見せてきました。そのマリアが今ではあのような状態なのですよ？私には……マリアはロシュ様の事が嫌いだったように思えないのです……」

「……」

魔王とカルオは黙ってしまった。

最初に口を開いたのは魔王だった。

「それでも申し訳ないが、私にとつての一番は息子なのだ。あなたには悪いがロシュの事は諦めてください」

そう言い魔王は一礼をしてきた時のような光の中へと戻って行った。

魔法を使う者

「それで？ミルオンは今どうなっているのですか？ウィリアム様」
その頃サギネルにある一室ムール・ミランの部屋ではウィリアムとムールが二人で話をしていた。

「はい。私がマリア姫にかけた魔法はロシュの手によって解かれてしまいましたが、それにいち早く気付いた私は即座にロシュの元へと赴きマリア姫の悩みを全て伝えてまいりました。あの調子ですとロシュの方から別れを告げるでしょう。今頃は別れを告げ終わっている頃合いかと」

胸に手をあて一礼した状態でウィリアムの目の前の椅子に腰かけているムールにそう告げた。

「では、私と姫の結婚はもう決まったようなものだな。早馬でミルオンへ文を出せ。明日ミルオンへ行く！」

「かしこまりました。」

そう言うウィリアムは侍女を呼びに部屋を出て行った。

その頃マリアは。

コン、コン

静まりかえったマリアの部屋内にノック音が響き渡る。

マリアは布団の中からモゾモゾと顔だけを出し「どうぞ」とノックに応えた。

マリアの声の後扉が開き、そこに立っていたのはマリアの兄ユリアスだった。

「マリア・・・調子はどうだ？」

ユリアスはコツ、コツと足音をたててマリアの寝台傍までやってきた。

マリアは無言のままユリアスを見上げた。

「・・・父上や母上、それにロール達が心配していたぞ？何か口に入れなければ熱もいつか出てくるだろうし。」

ユリアスはそう言いながら寝台横にある椅子に座る。

それでもマリアは顔を枕に埋めたままで何も言わなかった。

「マリア・・・。」

ユリアスは少し不安そうな、そうであって少し考えているような表情でマリアの名を呼び決意したように話を切り出した。

「マリア。城を出よう。私と一緒に」

「・・・え？」

それを聞いたマリアはやつと枕から顔を上げユリアスの言葉を聞き返した。

「今さっきサギネルから早馬で文が届いた。そこには“明日ミルオンへマリア姫に結婚を申込に参ります”と書いてあった。」

「つつ!!!」

それを聞いたマリアはベッドから勢いついて起き上った。

「父上には前々から話をしてあった。もし、ロシュがお前やこの国を裏切るような事がありお前が悲しい目にあうような事があるならば私がお前を連れて城を出てお前を守って生きて行く・・・そう父上にお願ひした。私は・・・もうお前が嫌いな人間と国のためと言って結婚するところを見たくはないのだ。それにサギネルは敵国だ。何があってもお前をあちらに渡す気は父上や母上、国の者たちにもない。」

ユリアスはそう言うのと頭の中で過去の事を思い出していた。

(7話) 「父上・・・お願ひがあります・・・。」

「なんだ？改まってお願ひなど、めずらしいな。」

カルオは苦笑じみた表情をユリアスに見せた。

「父上は、マリアが行方不明になったことを覚えておられますか？」

「忘れるわけがなからう？あの時はわしもお前も一緒に城の外にマリアを探しに行ったのだからな。サリナも今にも泣きそうな顔で心配していたしな」

ユリウスは頷くように目を閉じ俯いた。

『私は、泣いているマリアを見つけた時約束しました。』何があっても必ず守る』と。』

カルオはユリアスの話を黙って聞いていた。

『マリアは・・・自らの意思でこの国のために嫌な者と結婚しました。私は、今は好きではなくてもこれから未来・・・ロシユ様もマリアを好きになりマリアも・・・ロシユ様を好きになり。マリアが幸せになってくれるのならそれでも構わないと思いました。それが、マリアの願いだったからです。ですが、もしロシユ様がこの国やマリアを裏切るような事があれば私はロシユを許しません。そして、もう二度とマリアを悲しませないように、マリア自信が何と言おうと私がマリアをこの国から連れ出し幸せにしたいと思います。』ユリアスは目を開けまっすぐとカルオを見つめ言った。

『ですから、もし。その時が来たら。私とマリアが国を出ることをお許してください。』

『マリアは・・・良い兄を持って幸せだな』

カルオは今にも泣きそうな顔でそう言った。そして、

『よかるう。その時が来たら・・・ユリアスよ。マリアをよろしく頼むぞ。お前達が逃げるための後ろ盾は私に任せなさい。』

『ありがとうございます。父上』

『そんな事!』

マリアの声ではっとして現実に戻ってきたユリアスはマリアの方を見た。

『そんな事勝手に決めないでください!以前、お断りしたはずですよ!私は・・・ロシユ様の妻です。別れる気などありません・・・』

┐

『悪いが、既に城を出る準備は整っている。あの時はお前がこの結婚で幸せになるのなら・・・と諦めたが、今はもう話が違う。それに別れる気がないと言っても、ロシユは魔界に帰ってしまったぞ?』

もう二度とここには帰ってこないだろう。自分から別れを切り出したのだから」

「兄上は・・・何故そこまでして私を大切にしてくださるのですか？小さい頃に交わした約束のために・・・」

「マリアはベッドの上に座り込んだままユリアスに聞くと、いつからあったのか寝台横にある机にある杯の中に入っている物を何も言わず口に含んだユリウスはマリアの両頬を自らの手ではさみ口づけをした。

「ん！？んー！！」

「ドンドン！」とユリアスの胸をマリアは叩くがユリアスは唇を放そうとはしなかった。そして冷たい液体がマリアの口の中へと流し込まれた。マリアがそれを飲み込むとユリアスは唇を放し囁いた。

「お前を・・・愛しているからだ・・・兄としてではなく、一人の男として・・・」

最後まで聞き取れなかった。マリアがそのまま深い眠りについてしまったからだ。

その頃魔界では。

「ミルオン王には結婚の事話しておいたぞ。」

「ありがとうございます。」

謁見の間にロシュを呼びだした魔王はそう、ロシュに告げた。

礼を言った後すぐ立ち上がり後ろに振り返り謁見の間を後にしようとしたロシュに魔王は問いかけた。

「これで・・・良かったのか？」

「これが・・・マリアの為なのです。きっと今頃、結婚がなかったことになってマリア自信心の中で喜んでいることでしょう。」

「いや・・・」と言った魔王の言葉をロシュは聞き逃さなかった。

問い返すように後ろを振り向くと同時に魔王は言った。

「マリア姫はお前が別れをつげたあの日から部屋にこもりきりで何も誰も部屋にうけつけぬらしいぞ？それに、お前が別れを告げた後

マリア姫を最初に見つけたのはユリアス殿らしいが、本人の話だとマリア姫の瞳からは光が失われ頬には泣きじやくった後まであったそう。私がマリア姫を最初見かけたときはとても清んでいて美しい瞳だと思ったがな、そんな美しく清んだ瞳から光が失われると言ふ事はよほど悲しい事があつたとしてしか私は思わんが？」

「つつ・・・」

ロシユは何か言いかけたが言つのをやめ魔王から視線をそらした。だが、魔王の話は終わりではなかった。

「ミルオン王に話をした後、私は心配になつてなマリア姫の寝室に行つたのだが、マリア姫は眠っていたよ。その瞳の下のは確かに赤く腫れあがつていたな。かわいそうに。腕などを見たら3日飲まず食わずなのか痩せ細っていたぞ。」

「！？3日飲まず食わず！？」

それを聞いたロシユはまた魔王に視線を向け叫んだ。

だが、確かに頬は腫れ3日飲まず食わずではあるが魔王はマリア姫の寝室へや行ってなどいなかった。そう言えば、ロシユが心配してマリアの元へ赴くと思つたからだ。

「で、ですが・・・私には・・・もう・・・」

はつきりしないロシユに魔王はいらだち始めていた。

「強いて聞くが。」

魔王の言葉にロシユは俯いていた顔を上げ魔王の方に向いた。

「お前、マリア姫の気持ちはちゃんと聞いたのか？」

「・・・」

「・・・聞いていないのだな・・・」

ハア~~~~~。というため息を魔王から聞いたロシユは魔王に言つた。

「で、ですが！私はマリアを守りたい。あの時のようにマリアを悲しませたくない。マリアを悲しませる者達から救つてやりたい。たとえばそれが私自信だつたとしても私はマリアを守ります。それが私にとって悲しい事だつたとしても・・・。」

「ロシュよ。お前はちゃんとマリア姫に聞いたのか？『私の事をどう思っている？』や『結婚して良かったのか？』など」

「……いえ……」

「それではお前はただの決めつけだけで姫に別れを告げたと？」

ロシュはそれ以上何も言わなかった。いや、言えなかったのだ正しすぎて。

と、そこに

『ロシュ様！』

何者かの声がロシュの脳内に響いた。ロシュには誰の声なのかわかっていて。ミルオンに結界を張らせている魔神の声だった。

「どうした？」とロシュが答えると光輝く物がロシュの頭上に現れた。それを見た魔王は驚かずただ見つめていた。

「ミルオン国内から馬車が一つ結界の外に出ました。馬は早馬のようで馬車の中をのぞいたところ、二人若い男と女が乗っておりまして。女の方は何故か眠っているようでした。」

「若い男女？」

マリアとユリアスカ……。若い男女が誰なのかはロシュにも魔王にもすぐわかった。と、そこで

「ロシュ様」

今度は足元から声がしたのでロシュは足元を見ると、そこには子鬼が立っていた。

ロシュは肩膝を床につき子鬼と話がしやすいようにした。

「何があつた？」

「はい。どうやらサギネル国第一王子はミルオンにいらっしゃる姫君に求婚をしに行くようです。先ほど何人かの兵と黒いフードをかぶった男を1名連れてミルオンに向かいました。」

黒いフードの男、それはウィリアムに間違いはないだろう。

魔法を使う者

と、そこで魔神と子鬼の話を黙って聞いていた魔王が話をしだした。

「ロシユよ。マリア姫を迎えに行け。」

「ですが父上……」

いまだにまだ迷っている息子に魔王は怒鳴った。

「何を迷っている！今迎えに行かなければこの先一生マリア姫には会えなくなるのだぞ！姫を守ると決めたのであるう！それでいて守るために結婚までしたんだ！お前の私利私欲のためではないのだぞ！何を迷う！姫と結婚したのはお前だ！これから時間をかけていけば姫がお前のことを好きになることはいつかきつとくることだ！」

「……っ。」

そこで魔神が言った。

「ロシユ様。失礼ながら私も魔王様と同意見でございます。あなた方は我々普通の魔族より長い時を生きるでしょう。それを証拠に魔王様はもう1000年生きていらっしやりあなた様は400年生きていらっしやいます。ですがロシユ様のお母上は人間の御子でした。人間は長くて100年しか生きられません。魔王様は知っておられるでしょう。人間を好きになつた魔族の結露を……。そして魔界と人間界とでは時間の立ち方が違うということを」

その言葉にロシユははっとしたように魔王を見た。

魔王は苦々しく魔神の声のする光の方を睨んでいた。

まるで「このお喋りめ……」とでも言うように。

そして溜息をつき一瞬俯いた魔王はすぐロシユの方に目をやると言った。

「私が愛したのは生涯あれだけ……。あれ以外に何もいらぬあれとの間に生まれたお前以外何もいらぬ。お前も人間の娘を好きになつたのであるう？それならば……。今を大切にすべきだ。姫を迎えに行け。」

魔王のその言葉を聞くとロシュは決意したような強い眼差しを魔王に向け踵を返し謁見の間の扉を開けた。そして魔神と子鬼に言った。「お前たち、今マリアがどこにいるかはわかるな？子鬼は今までもおりサギネル王子を見はれもしミルオンに到着したり姫がいないことに激怒し暴れるようなことがあればすぐ私に知らせろ。そして、お前は私をマリアの元へ案内しろ。」

そう言いロシュは後ろに振り向き魔神の方を見やった。その瞳にもう迷いはなかった。

その言葉を聞いた謁見の間にいた使用人・従者・魔神・子鬼はホツとしたように胸をなでおろしていた。そして魔王は悲しそうな、それでいて呆れているような表情でロシュの方を見ていた。そして

「ロシュよ。あの時渡した薬は持っているな？」

あの時・・・マリアがサギネル国から魔法をうけて戻ってきたとき魔王から渡された瓶のことだ。

「はい」と返事をしたロシュに魔王は言った。

「それを使う時は近々きつとくる。それをお前がどう使うかはお前次第だ・・・」

それを聞いたロシュは少し目を見開いたがすぐに微笑みそして謁見の間を出て行った。

その頃城を出たムール率いる兵とウィリアムはミルオンに向かっていった。と、その時ウィリアムが馬を止めた。それに気付いたムールも馬を止めウィリアムに聞いた。

「どうしました？」

ウィリアムは空を見上げたまま舌打ちをしムールに言った。

「いえ、なんでもありません。少々用事ができましたので先に行ってください。必ずや後から追いかけます。」

ウィリアムがそういうとムールは何も言わずただ頷き兵を連れてそのままミルオンに向かった。

ムール達がいなくなるとウィリアムは小声で言った。

「戻ってこなくていいものを・・・いいだろう。今葬ってやろう。
ロシュ。魔王の座は私のものだ。」

そう言いそのまま馬を走らせどこかへ行ってしまった。

「う・・・ん」

ガタゴト、ガタゴト

馬車の揺れで目を覚ましたマリアは何故自分が今馬車に乗っているのか、今まで何をしていたのか、何があつたのかを懸命に思い出そうとした。と、その時斜め前から聞きなれた声がした。

「起きたか？」

その優しそうな口調にマリアは聞き覚えがあつた。異母兄のユリアスだ。そしてユリアスの声を聞くと同時に眠ってしまう前に何が起こつたのかを思い出し頬を真っ赤に染め頬に手をあてた。

そしてマリアは緊張気味の心を静めるため大きく息を吸いそれを吐きユリアスに聞いた。

「兄上、どこに行くおつもりですか？」

ユリアスはしばらく沈黙し答えた。

「南に・・・今は雪が降り大変かもしれないが馬車だから兵器だろう。そこにある別荘に行く。あそこなら雪で馬車以外の「者」は来れない。」

「者」というものが何を指しているのかマリアにはわかつていた。そしてマリアはさつきも話したであろう言葉をユリアスに言おうとした

「兄上・・・先ほども言いましたが。私は・・・」

最後まで言い切る前に馬の泣き声が聞こえ馬車が急に止まった。

ユリアスが扉を開け従者に声をかけようとした。

「おい！どう・・・っ!？」

その驚いているユリアスを見たマリアは不思議がつてユリアスの前を通り外に出た。外に出るときユリアスがマリアを止めた。

「ま、待て！マリア見るな！」

それでマリアは答えず外に出た。すると、馬の前で何日か前まで自分の傍にいてくれた人がそこには立っていた。そして、荒々しく息を吐いているその者はマリアに視線を向けると言った。

「マリア・・・すまなかつた・・・。お前を・・・お前を・・・愛している。もう一度、私にチャンスをくれないか・・・？」

その言葉を聞いたマリアは涙が流れ出てきたことにも気付かずそのままロシュの方へ駆け寄り抱きついた。そして。

「私も・・・私もあなたを愛しております。ロシュ様・・・。」

そう言い二人はお互いを見つめあいそして微笑みあつたあとロづけを交わした。ロづけは涙の味がした。

それを馬車から下りて見ていたユリアスは儚いものをみるかのように二人を見つめていた。

「マリア・・・。」

「憎いか？」

するとユリアスの耳元で誰かが囁いた。

「憎いであろう？ロシュが・・・お前はマリアがまだ幼い頃からマリアを愛していたのに。ロシュはそんなお前の気持ちも知らずお前の大切なものを奪って自分のものにした・・・憎いであろうなあ・・・私が力を貸そう・・・。」

その言葉を聞いていたらユリアスの瞳から光が失われた。

（そうだ・・・母上が死んだ後、私は悲しみそして誰にも心を開かなくなつた。そして父上は何を血迷つたのかまた新しく妃を迎えた。私はそんな父上を憎んだ。でも、マリアが生まれマリアが私を「あにうえ」と言葉が発せられるようになり私に駆け寄ってくる姿を見て。私は初めて自分のいる場所を見つけた。マリアの何も知らない清んだ瞳を私が守ろう。そう決めた・・・なのにあの男、ロシュ・ゾーンは結婚式の時初めてマリアと再開したのだというのにマリアの心を私から放した・・・あいつが・・・憎い・・・憎い！）

ユリアスの背後にいた男は微笑んだ。

「ならば、私に体を委ねろ。お前の憎んでやまないロシユを殺す手助けをしてやろう。」

そう言い魔法で自分の手に出した剣をユリアスの手に持たせた。

「これは魔族殺しの剣。これで心の臓を一突きすればロシユは死ぬだろう。」

ユリアスは鞘から剣を抜くと構えた。それを見たユリアスの背後にいた悪魔はユリアスの体から離れた。その悪魔はウィリアムだった。

ジャリ。

石を蹴る音を聞いたマリアとロシユは音の鳴った方を見て驚いた。

ユリアスが瞳から光を失った状態で剣を構えていた。

「あ、兄上！？何をするおつもりですか！」

マリアはロシユの前に立ち庇うようにしていた、がすぐロシユに腕を掴まれロシユの背に庇われるように後ろに隠される。

「ユリアス様・・・その剣・・・どこで手に入れられたのですか・・・？それにその瞳・・・まるで・・・」

（まるで、以前マリアがウィリアムに操られていた時のようだ。）

ロシユがそう心の中で呟くとユリアスの背後から笑い声が聞こえた。ロシユとマリアがユリアスの背後、声のする方を見ると、そこにはウィリアムが立っていた。

「ウィリアム！！」

「ウィリアム様！？」

二人はほぼ同時にウィリアムの名を呼んだ。

「この前のマリア姫の魔法はすぐ解かれてしまったな。マリア姫のお前に対する恨みが薄かったせいかな。だが、この者の憎しみは本物だ。だからまた魔法をかけさせてもらったぞ。さて、今度は簡単に魔法が解けるかな？」

ウィリアムはそういうと「やれ！お前のマリア姫を取り戻せ！」とユリアスに命令した。

魔法を使う者

その声に反応したかのようにユリアスは剣を振りおろしてくる。

それをロシュの背後で見ていたマリアはロシュの前に駆けて出た。

「だ、だめ！……！」

そして、剣はマリアの胸に突き刺さった。ユリアスには返り血がかり、自分の目の前で口から血を吐き倒れていくマリアを見たユリウスは我に返り叫んだ。

「あ……ま……りあ……あああああああ……！！！！！」

その叫び声は森中に響き渡った。

倒れていくマリアを支えたロシュは必死になってマリアの名を呼ぶ。

「マリア！マリア！！な、なぜ私を守った！バカ者が！お願いだマリア！死なないでくれ！」

マリアの名を呼び続けた。自分の腕の中にいるマリアが今にも死んでしまいそうだったからだ。

名を呼び続ければマリアは声に反応し死ぬことはないと思い呼び続けていた。

「ろ……しゅ……様……」

「しゃべるな！マリア……マリア……！！」

マリアは震える血まみれになった自分の手をロシュに差し出した。ロシュはただマリアを見つめ名を呼び続けながらマリアの手を握った。

「ろ……しゅ様……マリアは……しあ……わせです。こども
のころ迷子……になった私を……助けていただいたお返しが……
できましたね……」

そう言いながらマリアは微笑んだ。

「マリア……覚えて……覚えていたのか……私は……私は
あの時からお前を愛していた。泣いていたお前を守ってやりたいと

ずっと思っていた。だから……だからお願いだ……死なないでくれ……マリア……」

「わた……しも……あの時か……」

言い終わる時マリアは咳き込み口からいっぱい血を吐いた。そして息苦しそうにゼエゼエと息を絶え絶えにしている。

（ああ……死ぬって……こんな感じなのね……）

そしてマリアは少し微笑んだ後ユリアスを呼んだ。

「あに……うえ……」

ロシュの目の前で頭を抱えうずくまっていたユリアスはマリアの方に駆け寄った。

「ま……まり……わ……わたし……は」

ガクガクと手を震わせながらマリアの頬にユリアスの手が触れた。

マリアの頬は氷のように冷たかった。

「あに……うえ……なか……ないで……。わたし……の……だ
いす……な……」

言い終わる前にマリアは瞳を閉じた。

もうしゃべる力もなくなったのかただただゼエゼエと息を絶え絶えにしていた。

ロシュの掴んでいたマリアの手には力が消えていく。

「ま！マリア！マリア！」

ロシュはマリアの名を必死に呼び続けた。

それを見ていたウィリアムは驚いたように目を見開き、舌打ちをし後ずさった。

その時また石を蹴る音がしてユリアスが立ちあがった。

そしてマリアの血のついた剣を持ち、構えウィリアムの前に立った。

「ま、まて！私は悪くはないではないか！剣を振るったのはお前だぞ！自分の責任を私に押しつけるのか！」

ワタワタとした行動をとりながらもウィリアムはユリアスにそう言い続けた。

するとウィリアムの背後から声がした。

『やはり・・・このようなことになってしまったか・・・』
少し呆れたような声はさっきまでロシュが聞いていた魔王の声だった。

その声を聞いたウィリアムの表情は血の気がひいたような状態になっていた。

「ユリアス殿。今ここでこやつにそれを刺すのも良いが、マリア姫がそれを望むともお思いか？」

ウィリアムの背後に現れた魔王はユリアスにそう言った。その言葉を聞き一瞬ユリアスの体は揺れた。

「この者は魔界の住人だ。よって魔王である私の責任としてこやつは魔界に連れ帰り魔界の方法で処罰すると約束しよう。」

魔王はそういうと連れて来た兵にウィリアムを捕えさせた。

ユリアスは何も言わず、ただ黙ったまま剣を床に落とした。すると剣は灰となって消えた。

兵がウィリアムを連れていくところを見ていた魔王はそのままロシュに声をかけた。

「ロシュよ。まだ姫は死んではない。お前の腕の中で生きておるぞ。忘れたのか？こういうときのために私がお前にあるものを渡したのを」

それを聞いて我に返ったロシュは何もない空間から小瓶を出した。

その中には血のように赤い液が入っていた。

そしてこれを渡された時の言葉を思い出す「何か困ったことがあれば使いなさい。必ず助けてくれるはずだ」と、確かに魔王はあの時そう言った。

ロシュは小瓶の蓋を開け自らの口に含み息をするのがやつのマリアに口づけをし小瓶の中に入っていた液をマリアに飲ませた。

マリアが液を飲み込んだことを確認するとロシュは唇を放しマリアの手を握り続けていた。すると！マリアの体からまばゆいほどの光が溢れ出てそれを見ていたロシュもユリアスも目を閉じた。

光が消えるとさっきまで力を失っていたはずのマリアの手には力が

戻ったのかロシュの手を握り返していた。そして

「ん……」

呻くと同時にマリアは閉じていたはずの瞳を開けた。

「マリア!？」

それを、見たユリアスとロシュは同時にマリアの名を呼んだ。

ロシュはすぐマリアの血の出ていたはずの傷を見たが、そこにはもう傷はなかった。ただ赤くそまりきられた後のある服があるだけで傷はどこにも見えなかった。

マリアはそのまま何も言わず握られていない方の手をロシュの頬にあてロシュを見つめた。

「生き……て……る？」

マリアがそういうとロシュは

「ああ。ああ！マリア！お前は生きている！」

そう言いロシュはあまり力はいれずマリアを抱きしめた。

マリアの肩になにか冷たいものがこぼれたようにかかった。それに気付いたマリアは何も言わずただロシュの背に手を回し抱き返した。それを見ていたユリアスと魔王は安心したような表情をした。そして魔王はそのまま何も言わず魔界に帰った。遠い昔を思い出しているような表情をしながら

その後、マリア・ロシュ・ユリアスは共にミルオン王国に帰りすでに到着していたムールにウィリアムのことを告げ。その場で崩れたムールにカルオ王はサギネル国とミルオンのこれからのことについてムールに話をした。話し合いの結果、元々サギネル国第一王子ムールは戦争など馬鹿げていると考えていたので考えが一致したということで友好関係がきずかれた。

両国はこれからさらに発展することだろう。

その話し合いから1週間後2度目のマリアとロシュの結婚式が行われることになった。

「さすが姫様！やはり漆黒より純白のドレスが一番お似合いですね！」

まるで我が子を褒めるようにロールはマリアのウェディングドレス姿を褒めた。

『せっかく2度目の結婚式なんだ。今度は漆黒ではなく人間界のやり方の結婚式をあげよう』

ロシユはそう言ってくれたのだ。

マリアは恥ずかしそうに頬を染めた。すると、ノック音がした。

それを聞いたロールはニヤニヤしながら扉の傍まで行き、少し開けてノックした人物を見た。

「うふふ・・・ロシユ様がいらつしやいました。」

ロールはニヤニヤ顔を隠すことなく扉を開けロシユを部屋の中へと入れた。そして何も言っていないのにニヤニヤ顔のまま部屋を出て行った。

（もう！ロールったら！）

「マリア・・・ロールはどうしたんだ・・・？」

ロールのニヤニヤ顔を見ていたロシユは意味がわからず首をかしげていた。

「さ、さあ~~~~」

マリアはわざとらしくわからないフリをした。

そして、マリアはロシユの姿をマジマジと見つめた。

（・・・さ・さすがロシユ様・・・黒も似合うけど・・・純白も似合うのね・・・）

マリアの視線に気付いたのかロシユは頬を真っ赤に染めた

「な、なんだ？」

「いえ、さすがロシユ様ですね。お似合いです。」

とマリアが正直な気持ちを言うとロシユはゴホンと小さく咳をし小声で

「お・・・お前も・・・にあって・・・いる・・・」

それを聞いたマリアも頬を真っ赤に染めてしまった。

マリアが礼を言おうとするとロシユは片膝を床につけた。そして

「マリア。改めて言おう。１０年前魔界で泣いているお前を見つけた時から私はずっとお前のことだけを考えていた。私と、結婚してくれない・・・か？」

ロシユは片膝をついた状態で上を眺め、マリアの顔を見ると。マリアは

「はい！私も１０年前に助けてくれたあなた様が大好きでした！ひと時も忘れたことはありません！」

ロシユはそのまま立ちあがりマリアの腰に手を回し口づけをした。

その後二人は魔界に帰り魔界の王、妃となった。

魔法を使う者（後書き）

「魔法を使う者」読んでくださった皆様ありがとうございます！[^]
[^]W

この後二人は魔界で幸せに暮らして行く・・・という設定でつすb
もし皆様からの投票が良いようならこの二人の子どもの物語も書いてみたいと考えてます！><

私の初ネット書き小説で初少しちよいエロ小説でしたが・・・まじめに書くの大変でした・・・特にエロシーンが・・・汗
エロシーン書くだけに何時間かったことか・・・早く慣れたいものですね・・・。

さてさて、今既に何話が出てますが「御子と魔王」というお話が出ております。少しこそ〜っとこのお話を読んでくれた方にだけ教えちゃおうかな・・・

実は・・・「御子と魔王」は「魔法を使う者」と無関係ではありません！

詳しくは読んでみてくださいね[^][^]W読んだらきつと関係性がわかります！b

それでは皆様、今回はこのくらいにしておきましょうか？

作品を読んでいただいてありがとうございます[^][^]W

「。°。+バイバイ+。°。」>o(*´、´)(ノ)(

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5268p/>

魔法を使う者

2011年10月8日12時24分発行